正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡

立地と環境　正楽寺跡・儀長城跡・儀長寺通遺跡は三宅川により形成された自然堤防上に所在する。地籍は稲沢市儀長町で、標高は約2.5mをはかる。遺跡の周辺には、西方に弥生時代中期末の集落遺跡である一色青海遺跡が所在する。また、三宅川の対岸には尾張国分寺、さらにその北西には国分尼寺、北東には尾張国府など古代尾張地域の行政的な中心部も隣接している。

本遺跡は、その名称にも使用されているように、古代には『正楽寺』、中世には『儀長城』が存在したと伝承をもつ遺跡となる。前者の正楽寺は、尾張国分寺の四至に設定された四楽寺の一つで、尾張国分寺から西方へ0.6～1.0kmの距離を有する。後者の儀長城は片原一色城の支城として、在地勢力である『橋本伊賀守』の一族または家臣が居住していたとされている。なお、儀長城は、橋本一族の本城である片原一色城からは南東2.0kmに位置する。

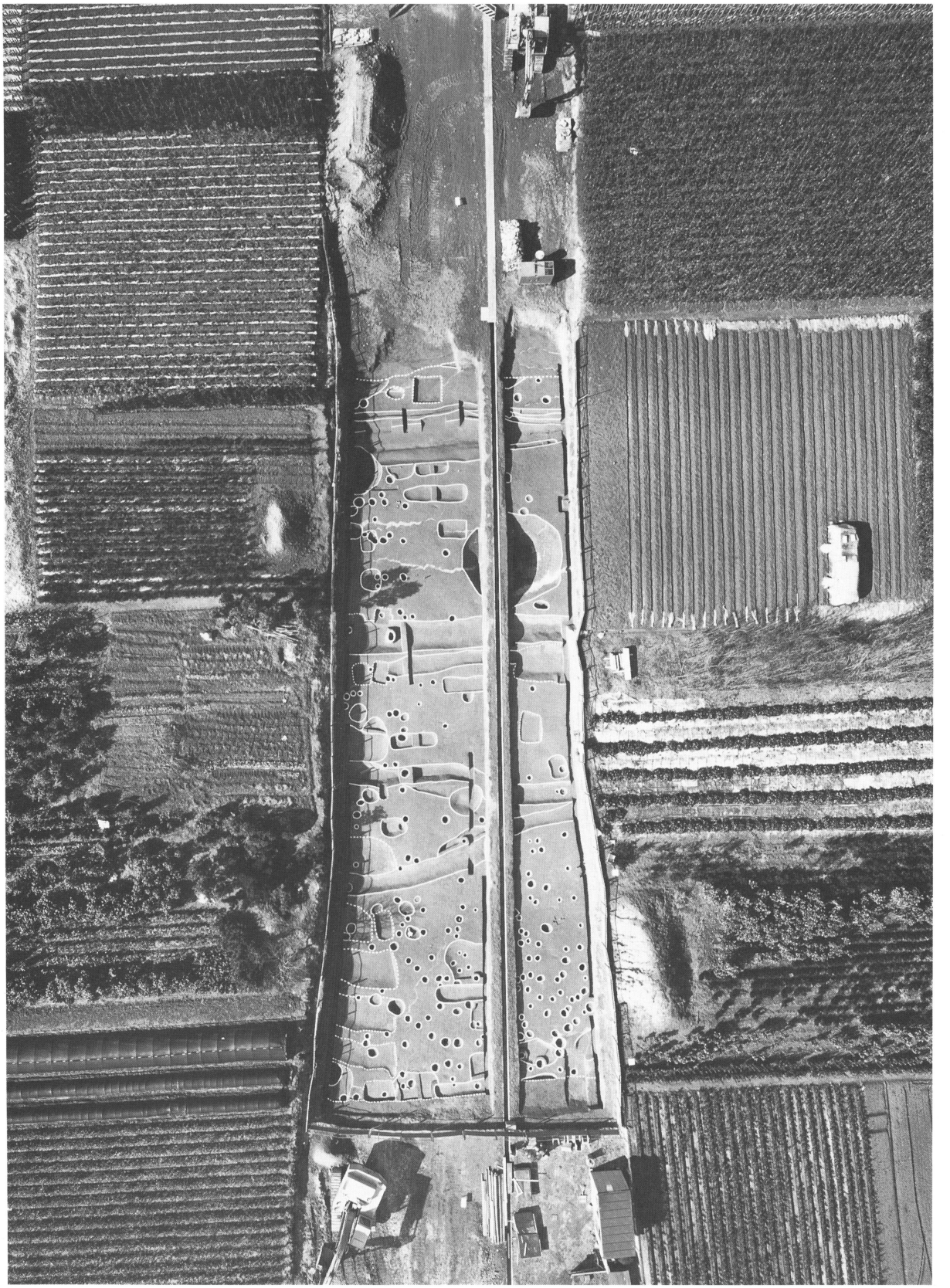
今回の調査は、県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、昨年度からの継続事業として実施している。本年度の調査は総面積5170m²で、これをA区～D区の4地区に分割して実施した。それぞれの面積は、A区（732m²）、B区（1314m²）、C区（1492m²）、D区（1632m²）となる。調査期間は9月～3月である。

遺構　今回検出できた遺構は、竪穴住居、堀立柱建物、柵、土坑、溝などがある。遺構の分布状況はA区が濃密で、西側ほど希薄となる。次にこれを時期別に整理すると、古墳時代後期と奈良・平安時代、鎌倉時代、江戸時代にまとまりをみることができる。まず、古墳時代後期の遺構は、竪穴住居、土坑、溝が検出されている。遺構の分布範囲は、A・B区で濃密、C・D区で希薄となる。土坑のなかには掘立柱建物の柱穴の可能性をもつものも存在しており、居住域と考えられる。次に奈良・平安時代の遺構であるが、検出できた遺構は乏しく、土坑が数基検出されているにとどまる。この時期は、遺跡の名称にもなっている『正楽寺』に関わるが、その内容は判然とはしない。また、鎌倉・室町時代の遺構は、堀立柱建物・井戸・土坑・溝で構成される遺構群となる。全面に溝による方格地割が設定され、調査区には屋敷地が構成される。江戸時代の遺構は、C期の地割りを継承する形で、数条の溝が確認されている。このほかC区では幅5mを前後の溝が、前者の溝を破壊する状況で3条確認されているが、他の遺構と方位や規模が異なることから、その性格は今後の課題となる。

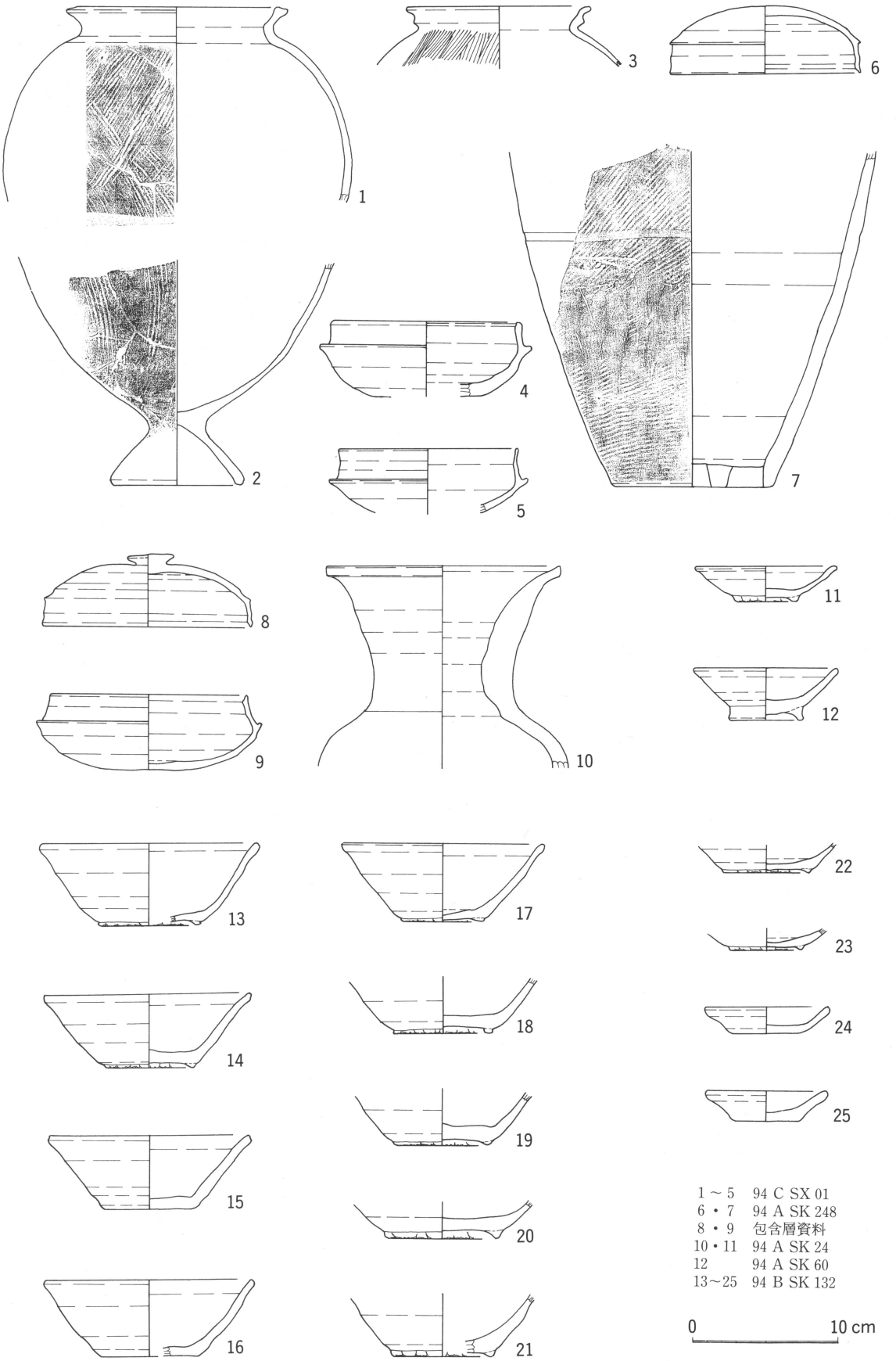
まとめ　本年度の調査は、鎌倉・室町時代の屋敷地が代表的な遺構となる。しかし調査面積の関係から、その構造にまで論究できる資料を得てはいない。なお、遺跡の名称となっている「正楽寺」や「儀長城」は、その実体を確認することができなかった。

（池本正明）

調査区位置図（1：2500）



A 区全景


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
1～5　94 C SX 01
6・7　94 A SK 248
8・9　包含層資料
10・11　94 A SK 24
12　94 A SK 60
13～25　94 B SK 132
0
10 cm